

タイトル	『マルクスの人間主義-その根源性と普遍性-』によせて
著者	美馬，孝人
引用	季刊北海学園大学経済論集，55(4)：1-19
発行日	2008-03-00

《論説》

『マルクスの人間主義 —— その根源性と普遍性 ——』によせて

美 馬 孝 人

1

昨年（2007年）12月、本学で長く社会思想史の講義を担当され、主に近代思想、特にヘーゲルとマルクスの哲学研究にいそしんでおられた橋本剛先生（本学名誉教授）が、著書『マルクスの人間主義——その根源性と普遍性——』（窓社）を出版された。

ソ連邦とその後の「社会主義」圏の崩壊後、従来から指摘されていた「既存の共産主義」の非人間的側面があらためて暴露され、また宣伝されたこともあって、マルクス主義が本来「人間解放」を求めるきわめて人間主義的な思想であることがすっかり忘れ去られてしまったようである。そのためか最近では、第2次大戦敗戦後の日本の青年や学生を魅了したマルクス主義関係の書籍は、書店においてもめっきり少なくなり、マルクスやエンゲルスの翻訳書すら見出すことが難しくなっている。本書はそのような悲惨な現状をもたらした諸原因に反省的な考察を加えながら、前著『人間主義の擁護』（窓社、1998年）に続いて、これまで教条主義的におごなりに扱われていた重要な諸論点をもう一度理論的に整理しなおし、それらに新しい積極的な解釈を提示することによって、マルクス主義の人間主義的な本質を再確認し、その現代的な再生を促すために書き下ろされたものである。

振り返ってみると、私が学究生活をはじめ

た頃、日本のマルクス主義研究は最盛期にあったようで、大月書店から邦訳全集が次々と出版されていて、初期の手稿類も翻訳され始めており、「既存の社会主義」体制に対する批判とも絡まりあって、本書が取り上げている諸問題は専門家の間で盛んに論じられていた。したがって人間社会の貧困問題を研究課題にしようと考えていた私も、それらの諸問題に不十分ながらも取り組んだのであるが、疑問を感じながらもそのまま放置していた重要な諸論点も多かった。本書はそれらの重要な諸論点について、当時の「正統派」的解釈の誤りを指摘するばかりでなく、原文をも引用して、曖昧な日本語のままに見過ごされてきた従来の翻訳を厳密に訳し直すことによって問題点をわかりやすく解明しており、読んでいて心地よい知的な刺激をあたえてくれるものとなっている。本稿は、この著書に提起されているいくつかの論点について私の考えを述べるものであるが、それに取りかかる前に、もう一人の学者についてひとこと触れることをお許しいただきたい。

同じ昨年（2007）12月、長い間マルクス主義の研究と、関連する文献の探索に携わっておられた服部文雄先生（東北大学名誉教授）が逝去された。岩見沢時代の私の二人の恩師が服部先生をよくご存知であったこと（一人は先生として、一人は大学同期生として）と、大学院時代に私が最も力を入れて研究したのが先生のお父さんにあたる英太郎先

生の社会政策関連著作であったこと、また先生のお弟子さんにあたる人が本学にもおられたことなどによって、私は先生と親しく接する機会があった。2～3年前仙台でお会いし会食した時、東北大出の先輩達が文雄先生の容貌が英太郎先生そっくりになったと語っていたことを思い出す。

服部先生は博識のうえ厳密に文献研究を行う人なので、難解な外国文献の研究にあたっては本人の努力を前提としての事ではあるが、先生に確認するのが確実で手取り早いなどと言われていた。私は『資本論』第1巻の「本源的蓄積」のところにある、ヘンリ8世治世下における浮浪者7万2千人の処刑数について(プログレスの英語版では7千200人となっているので)いつか確認してみたいと考えていたが、果たせなかった。しかし先生の地道な努力は、従来の通説的なマルクス解釈を大きく変えていく可能性を開いているかもしれないのである。

ここに先生が自分の業績について書かれていることの一部を紹介して、哀悼の意を表しておきたい。「80年代の末に、はからずも『共産党宣言』を翻訳する機会があたえられましたので、私は初版以降のさまざまな時期に刊行されたドイツ語版をはじめ各国語版の入手につとめて比較検討しましたが、従来の諸訳がすべて「30ページ本」を底本としていたのにたいして、「23ページ本」によって訳出することを試み、刊行150年にあたる昨年(1998年—美馬)に改版改訳をすることができました。ソヴェト連邦や東ドイツの解体によって研究の交流に困難が生じたことは否定できませんが、他面ではこれまで入手が不可能と思われていた原資料に接することができるようになりました。『共産党宣言』については、刊行150年を記念する重要な成果が旧東ドイツの研究者達によって上げられ、「23ページ本」が初版であることが解明されました。」(服部文雄『マルクス探索』新日本

出版社、1999年、あとがき、による)。

2

『マルクスの人間主義』の第1章は、「人間の本質」の把握に当てられている。有名な「フォイエルバッハにかんするテーゼ」6は、橋本氏によって次のように翻訳される。「フォイエルバッハは、宗教的本質を人間的^{ヴェーゼン}本質へと解消する。しかし人間的^{ヴェーゼン}本質は個々の個人に内在する抽象物ではおよそない。その現実性においては、それは社会的諸関係の^{アンサンブル}総体である。」(邦訳全集では、3巻、4ページ)

人間の本質を社会的諸関係の総体と規定しているこの部分を一つの根拠として、広松渉氏を代表者とする物象化論者は、マルクスが『ドイツイデオロギー』を契機に「疎外論から物象化論へ」と進化したものとし、『資本論』はその成果であり、証明であると主張するのであるが、橋本氏はこの主張を断固として拒否してマルクス「疎外論」の一貫性を擁護する。参考になるのは弁証法的論理についての橋本氏の次のような解説と主張である。

「関係という概念は、運動とか生成という概念に劣らず、きわめて弁証法的である。弁証法の論理にとって本質的に不可欠なものは、当該の事柄における〈内在的否定性〉であるが、〈関係〉に関して言えば、その〈内在的否定性〉は〈一と多〉とにかかわるそれである。〈一〉は関係項の〈全体としての統一性〉すなわちまとまりの面を、そして〈多〉は関係項の数多性の面を表している。……〈関係〉がそれ自身として関係であり続けるのは、そこに内在する〈一〉と〈多〉との分離ではなく動的な関連によってであり、これが内在的否定性である。……だから弁証法家ヘーゲルは、いずれの一面化をも排して関係の弁証法を表現するために、〈一と多の統一〉と言った。形式論理的に言えば、一は多ではな

く、多は一ではない。そしてこれら〈相互に否定的な〉両者の統一であるもの（大統一としての関係）は、両者のいずれでもなく、またいずれでもあり、いずれか一方に落ち着いてしまうことはありえない。すなわち、生きた〈関係〉というものは、関係の諸項〈多〉と関係の全体〈一〉との間でのこうした論理的な矛盾を内包した全体なのだといえよう」。

社会的諸関係の総体というとき、総体には「アンサンブルというフランス語が使われているが、マルクスは複数の演奏者と多用な楽器とを含むそのアンサンブルを、〈生きかつ活動している関係項〉にとって担われ続けている〈全体〉に対するイメージ的な表現としてふさわしいと考えたのではないか」。

しかしこの「フォイエルバッハテーゼ」6の中でさえ、続けてマルクスが指摘しているように、「人間を社会諸関係の総体」と規定するのは、「人間の本質」規定の一面に過ぎない。『ドイツイデオロギー』にはより本質的な次のような叙述がある。「人びとは人間を、意識によって、宗教によって、そのほか好きなものによって動物から区別することができる。人間自身は、彼らの生活手段を生産し始めるや否や、自らを動物から区別し始める。」

橋本氏によれば、『ドイツイデオロギー』のこの言葉の中には、「人類史の過程における人間の生産的労働と〈人間の人間化〉との不可分の関係が指摘されている。」それは動物一般と人間の区別にかかわるものであり、したがって人間存在の本質的規定のことである。すなわち人間はそもそも動物であるが、生産的労働によって人間となっていくというのである。この労働による人間の人間化は、橋本氏によって、別の場所では「人間的な力の発展」あるいは「たえざる自己形成」とも表現されている。

この本質規定が、先の「フォイエルバッハテーゼ」に含まれていない。これについて橋

本氏は言う。「先のテーゼの主眼は、フォイエルバッハの本質理解の抽象性を指摘し、カテゴリー論的に批判し、これによって〈人間における自己疎外〉の克服の問題を、現実の社会の中での実践的課題として位置付けるという点にあった。……このカテゴリー的批判の核となるのが「現実性 Wirklichkeit」の概念であり、これはヘーゲルの論理学の中では、広義の「本質」概念の最後の段階として位置付けられている。広義の本質概念は「現実性」にいたって始めてその具体的な現実性を現わすことになる。先のテーゼで「人間の本質」に関して「その現実性においては」と付け加えた意味は、ヘーゲルから継承したこうしたカテゴリー論的展開を踏まえてこそはじめて、正確に理解されるはずなのである。……ドイツイデオロギーの規定が基底的作用を担い、テーゼの規定と相互媒介的に関連しあっている」と。見事な解説である。

3

次の問題は、「既存社会主義」の実験の失敗によって信用を失墜させた「共産主義」に対して、マルクスの言う「共産主義」が、ほんらい社会的人間にとって真の自由の国であり、人間の本質が開花する社会であることの解明である。

これは二つの点から行われる。第一は、「ヨーロッパ18世紀啓蒙の最も良質的な部分とマルクスの「共産主義」思想とが、高い理念のレベルにおいて不可分の継承関係にある」ことを明らかにして、カントの「目的の国」が人間的な自由の国として、「共産主義」とほぼ同義であることを論証すること、そして第二は、「マルクスの共産主義および人間の本質の概念が「人間疎外」との対決に裏打ちされていることによって、その理論的な質の高さあるいは深さを獲得している」ことを確認し、共産主義が、商品市場という物的関

係に支配されている人間関係の諸問題を真に解決して「真の自由の国」をもたらすものと展望されていることを論証することである。

『ヘーゲル法哲学批判序説』においてマルクスは宣言する。「宗教の批判は、人間が人間にとっての最高の存在であるという教説で終わる。したがって人間を卑しめられ、隷属させられ、見捨てられ、軽蔑された存在にしておくような一切の諸関係を、覆せという……至上命令をもって終わるのである。」(邦訳全集, 1巻, 422ページ)。

橋本氏は、最後の部分にある至上命令を「カテゴリーインペラチーフ定言的命令」と翻訳しなおして、次のように述べている。「若きマルクスははっきりとカントを念頭に置き、この大先輩に敬意を払いながらも、カントの「定言命法」に対するマルクス自身の唯物論的解釈を差し挟んで見せている」と。

橋本氏は、『啓蒙とはなにか』、『人倫の形而上学的基礎』などカントの著作によって彼の思想をたどりながら、「カントはデカルトに習い、あらゆる隷属状態からの脱却＝自己解放こそは、理性を自然素材として与えられている人間存在に課せられた義務なのだと主張しているといえる」と指摘する。そしてアンシャンレジームに替わって、近代的な「国民国家」が世界史的に成立していく時代にあって、カントの最大の課題はなんであったか。「実はカント自身の問題意識は、巨大な新時代を背負って登場した新たな論敵ホッブズとの対決の方にこそより多く向けられていたのではないか」と問題提起するのである。

ホッブズとカントには相当の時代的なずれがあるので、カントはおそらく直接的にはホッブズ以後のロックやブラックストーン、あるいはジェームズ・スチュアートやスミスなどの、フランス人ではコンドルセ、シェイエス、ルソーやフィジオクラートの思想と格闘したと考えられる。しかしこれら新しい「自由な国家」の構造のあり方を構想した人

たちが例外なく悩まされたのは、「私有財産」が発生させる人間の利害関係の根本的な対立という問題であった。端的に言えば、土地その他の資産の所有者と無産貧民＝労働者という両対極で敵対しあっている人びとを、どのようにして彼らの個人的な自由を保証しながら近代国家の中に統合するのかということである。この点でホッブズは、王党派の立場に立つイギリス・ピューリタン革命時の理論家として、彼の後輩たちよりも私有財産の内包する敵対的な本質をより鋭く明解に把握していたといってもよいかもしれない。

橋本氏の見解では次のようである。「資本の論理の世界をホッブズは無機的な非情さで展開して見せた。ホッブズは個人の生存権を大前提としているのだが、この生存権の権利としての正当性は、「自然権」として、この地上世界のあらゆるものに共通する自らの存在の「自己保存」性向に由来するとされている。……人間の自然権としてのこの「生存権」は、その誕生と存立に関してどこまでも各自の個体存在に固有のものであって、他人からの承認に支えられたものでも、また支えられるべきものでもない……。むしろ各自の生存権の無制限の行使に関して制限ならびに障碍として立ちはだかるものは、すべての他人(のそれぞれの生存権)以外にはない。このようにホッブズにあっての「自然権」(自己保存のためにあらゆることをなす自由)は、いかなる共同性とも無縁であるゆえに、各自の排他的な行動原理以外ではありえないことになる。それは放っておけば必ず衝突と相互の争いに帰着せざるをえない。平等主義者ホッブズは、諸個人の間の本来的な平等がかえって、「争いの中での相互不信を抜き差しならぬものにし、争いが終息するのはいずれか一方または双方の没落によってのみである」と断言する」。

カントはフランス人の言う「人間精神の進歩」の概念を積極的に受け入れて、人類史を

人間が備える潜在的な理性が顕在化し、実現していく過程としてとらえようとするのであるが、人間は理性的存在者として諸目的を設定するばかりでなく、自分自身を「自存的目的」として理性を実現していくという使命を課せられているものと考え。そして人間の道徳や尊厳もまたここから導き出されるのである。橋本氏は次のようなカントの言葉を引用している。「理性的存在者はすべて、その各々が自分自身とすべての他人を決してたんに手段としてのみでなく、常に同時に目的それ自体として扱うべきである、という法則の下にある。このことによって、共同的な客観的な法則による理性的存在者の体系的結合すなわち一つの国が生ずる」。「道徳性は、その下でのみ理性的存在者が目的それ自体であることができる条件である。なぜなら、理性的存在者は、道徳性を通じてのみ目的の国における立法的成員であることが可能だからである。それゆえ、道徳性を備えることができる人間性と、そのみが尊厳ビュルデを持つ当のものである」。

こうしてカントは人類史上に燦然と輝く「人間の尊厳」の理念を高く掲げることになったのであるが、橋本氏によれば、これは人間をモノ並みに扱ったり、手段化したりする私有財産の体制、あるいは資本の論理に対抗することによってもたらされた。「カントの「人格の自己目的性」概念は、キリスト教会によって彼岸の天上世界にしつらえられた神と、此岸の地上世界の神たる〈貨幣—資本〉という腹背の敵に抗して人間存在の自立と尊厳を確保するために、ついに人間自身のうちに発見された一つの思想史的到達点であった。「自己目的」というとき、そこには自らのあり方の到達点を目指してその実現のために努力するということが含意されている」。

人間を人間にとっての最高存在とし、その理想的なあり方を追及しようとする思想は、

フィヒテやヘーゲルに受け継がれる。青年ヘーゲルがカントの『純粹理性批判』を読んだ後に、シェリングへ送った手紙が紹介されている。「人類が自分自身の前に、これほどまでに尊敬に値するものとして表現されるということほど、この時代のよき兆候はないと僕は思う。それは地上の圧政者と神々の頭の後光が消滅したことの証明である。……すべてはいかにあるべきかという理念の普及につれて、永遠にすべてをあるがままに受け入れる平静な人々の怠惰は消滅するだろう。」

カントがホッブズ批判を媒介として、すでに商品・資本市場にみられる人間の物化、手段化に対決して人間の自己目的化、人間の尊厳の理念に到達していたのだとすれば、カント哲学もまた宗教批判の形をとりながら人間自身が手段化している近代社会の克服、人間の疎外状態の克服を、すなわち市場における自由・平等の陰に覆い隠され、抑圧されている人間の真の自由、潜在的理性の顕現を追及していたのだ、ということになる。

周知のように、マルクスもまたヨーロッパイデアリスムス啓蒙思想の進歩史観とドイツ観念論哲学を確実に受け継いでいる。青年マルクスの初めての大きな仕事が、ヘーゲルの法の哲学の批判であった。ドイツ哲学の人間主義を哲学的思考の中に閉じ込めておくのではなく、歴史の現実的な課題にしようとするのが彼の課題である。したがって彼は、現実の歴史の中に人間的な進歩の痕跡を確認し、また現実的な歴史の中に人間の自己実現の可能性とその条件を明らかにしようとするのである。『ドイツイデオロギー』には次のように述べられている。

「一つの階級の諸個人がもつに至った共同関係、しかも彼らの共同の利益を誰か第三者に対して守るためになくては済まされぬものであった共同関係というものは、これらの諸個人をただ平均的な個人としてのみ……所属させていたような共同体であり、彼らが個人

としてではなく、もっぱら階級成員として参加していたような関係であった。これに対して、自分たちとあらゆる社会成員達の生存条件とを掌中に握る革命的なプロレタリア達の共同体の場合は、これとはまったく逆であって、これには諸個人は個人として参加する。それこそは諸個人の自由な発展と運動の諸条件を彼等自身の掌中に握らせる諸個人の結合に他ならない。」(邦訳全集3巻, 70-1ページ)。

また、マルクスが哲学の批判から経済学の批判へと向かおうと決心して、現実の経済社会の状況を説明し、哲学者達にわかる言い方として「疎外」という語を用いた有名な文章には次のようである。

「労働の分割によって必須となったさまざまな個人の協働ということから生じる幾層倍にもなった生産力、この社会的力はこれらの個人には、協働そのものが自由意志的ではなく、自然発生的であるがゆえに、彼等自身の統一された力としては現れないで、なにか疎遠な、彼らの外にある強制力として現れる。この力については諸個人はその由来も行方も知らず、したがってもはや統御することもできないのに反して、逆にその力の方はある独自の、人間達の意志や行動とは無縁な、いやそれどころかその意思や行動を支配さえするところの諸局面、諸段階を順繰りに経てゆくのである。……ところがこれに反して、土台をなす私的所有が廃止され、生産が共産主義的に規制され、これに伴う当然の結果として人間と彼等自身の生産物との疎遠な間柄が無くされると、需要と供給の関係の法は全く効かなくなって、人間は交換、生産、彼らの相互関係のあり方を自由に支配しうる力を取り戻すことになるのである。」(同上, 30-1ページ)。

『ドイツイデオロギー』執筆以前に、マルクスは市民社会の経済的基礎とブルジョア経済学の批判的研究に着手していたが、その成

果の一部が示されている『経済学・哲学草稿』では、市民社会における人間の手段化が次のように述べられている。

「社会——国民経済学者たちにとって現れているような——は、市民社会であるが、そこでは各個人は諸々の欲求の一全体であり、彼らが相互の手段となる限りでだけ、他人は各個人のために現存するし、また各個人は他人のために現存する。国民経済学者は——政治学がその人権について行うのと同様に——すべてのものを人間に、すなわち個人に還元し、そして個人を資本家あるいは労働者として固定化するために、この個人からあらゆる規定性を剥ぎ取るのである。」(城塚・田中訳, 岩波文庫, 168ページによる)。

また、市民社会の基礎をなす私的所有＝私有財産の止揚と共産主義の関係は次のように展望されている。

「人間の自己疎外としての私有財産の積極的止揚としての共産主義、それゆえにまた人間による人間のための人間的本質の現実的な獲得としての共産主義、それゆえに、社会的すなわち人間的な人間としての人間の、意識的に生まれてきた、またいままでの発展の全成果の内部で生まれてきた完全な自己還帰としての共産主義、この共産主義は完成した自然主義として＝人間主義であり、完成した人間主義として＝自然主義である。これは人間と自然との間の、また人間と人間との間の抗争の真実の解決であり、現実的存在と本質との、対象化と自己確認との、自由と必然との、個と類との間の争いの真の解決である。それは歴史の謎が解かれたものであり、自分をこの解決として自覚している。」(同上, 130-1ページ)。

この人間的解放の問題は、マルクスの経済学批判の集大成ともいえる『資本論』第3巻の第7編第48章「三位一体的定式」の中で、人類の歴史的・経済的發展の中に位置付けられて、断片的な形ではあるが次のように展開

されている。

「じっさい自由の国は、窮乏や外的な合目的性に迫られて労働する、ということがなくなるときにはじめて始まる。つまりそれは当然のこととして、本来の物質的生産の領域のかなたにあるのである。……自由はこの領域（物質的生産の——美馬）の中ではただ次のことのうちにありうるだけである。すなわち、社会化された人間、結合された生産者達が、盲目的な力によって支配されるように自分達と自然との物質代謝によって支配されることを止めて、この物質代謝を合理的に規制し、自分達の共同的統制の下におくこと、つまり力の最小の消費によって、自分達の人間性に最もふさわしく、最も適合した条件の下におくということである。しかしこれはやはりまだ必然性の国である。この国のかなたで、それ自身にとって自己目的としての意義をもつ（邦訳全集では——自己目的として認められる——となっている）人間的な力の発展が、すなわち真の自由の国が始まるのであるが、しかしこれは、ただあの必然性の国をその基礎としてその上にのみ開花することができるのである。労働日の短縮こそは根本条件である。」（橋本訳——邦訳全集、25巻B、1051ページにあたる部分）。

マルクスは人間を、動物でありながらも労働を媒介としてしだいに人間的な動物となっていく「絶えざる自己形成」的な歴史的存在と見ていたのであるが、上の引用文によれば、本来の物質的生産の必要を克服した後にくる「真の自由の国」において、はじめて自己目的としての意義をもつ人間的な力の発展が始まることになる。

「人間を人間の最高存在であると言明する立場に立って」（『ヘーゲル法哲学批判序説』、邦訳全集、第1巻、428ページ）人間の解放を求め続けたマルクスが、その現実的諸条件を探るために経済学批判に没頭し、人間の経済社会の歴史的発展の中に展望したのがこの

「真の自由の国」であった。「自由の国」について語っていただきたいにマルクスは、カントの「目的の国」について何がしか意識するところがあったのではないか」という橋本氏の問題提起は、初期のマルクスから『資本論』への発展をあとづけて見るとき、肯定的な結論が与えられるとあってよいであろう。

4

第3章「疎外された労働論と労働価値論」は、最もわれわれの興味をひく部分である。『資本論』の中でも、第1章第3節「商品形態または交換価値」で展開される価値形態論は、緻密な論理の進め方によってわれわれを魅了するのであるが、普通ここでの論理展開作業は、マルクス自身の言葉にそって「貨幣形態の生成を示すこと」と、「これによって貨幣の謎も消え去る」（『資本論』邦訳全集23巻、65ページ）ことを明らかにするものと理解されている。そして第4節「商品の呪物的性格とその秘密」は、貨幣崇拜、あるいは人間の商品・貨幣市場への従属の必然性を明らかにしている難しい部分であるが、商品形態は社会的分業の歴史的な一時代に特有なものであることの解説と理解されているであろう。この難解な部分には、それがふさわしいと思われる「疎外」という言葉が使用されていないのである。

しかしこの部分を、ヘーゲル弁証法論理学の「疎外」概念を念頭において解明し、呪物崇拜そのものの中に初期マルクスの疎外形態を再確認し、さらに資本の中にその発展的展開を探っていこうとするのが橋本氏の方法である。マルクス自身が『資本論』第1巻の第2版後記に次のように書いている。「私は自分があの偉大な思想家（ヘーゲル——美馬）の弟子であることを率直に認め、また価値論に関する章のあちこちでは彼に特有な表現様式に媚を呈しさえした」（同上、23ページ）

と。

われわれはまず、橋本氏が「目を見張った」商品を生産する労働の二重性の確認から出発しよう。労働は必ず一定の目的をもつ具体的で有用な活動として、たとえば裁縫労働あるいは織布労働の形で行われるが、労働のこの側面は「有用労働」として、「人間のすべての社会形態から独立した存在条件であり、人間と自然との間の物質代謝を、したがって人間の生活を媒介するための、永遠の自然必然性である」(『資本論』第1巻、前掲邦訳、58ページ)。

しかし商品生産の社会では、各商品の需要に応じて具体的な労働の形態は次々と変わっていくから、それぞれの労働の具体的な有用性を無視するとすれば、「労働に残るものは、それが人間の労働力の支出であるということである」(同上、59ページ)。「すべての労働は、(この——美馬挿入)一面では、生理学的意味での人間の労働力の支出であって、この同等な人間労働または抽象的人間労働という属性においてそれは商品価値を形成するのである」(同上、63ページ)。

問題は、抽象的人間労働の対象化したものである価値が、労働主体である人間を支配するにいたる筋道を追及して、主客が転倒する限界点と主客転倒の必然性を明らかにすることである。この課題を橋本氏は見事に成し遂げているのである。

単純な価値形態は次のように表現される。

「20 エレのリンネル＝1 着の上着、または20 エレのリンネルは1 着の上着に値する」。

「すべての価値形態の秘密は、この単純な価値形態のうちにひそんでいる」(同上、65ページ)とマルクスは述べて、左辺の相対的価値形態と右辺の等価形態について詳細な分析をして見せ、価値形態の発展とその意義について説明しているが、橋本氏はそれらを適切に次のように要約している。「相対的価値形態の側が価値関係における主語すなわち主

役の座にあることははっきりしているが、しかしこの「第1の価値形態」においては、たしかに二商品のうちのいずれが主役の座を占めるかは固定してはいない、きわめて流動的である。それにもう一つ。価値形態という名称を与えられてはいても、二商品の個別な関係としてのこの第1形態では、「価値」は未だ「使用価値」をもった具体的な商品体から明瞭に区別された仕方では表立ってきてはいない。つまり一方の側の商品(商品A)の〈価値〉は相手側の商品Bの具体的な肢体とその〈使用価値〉にまといつかれ、その背後に隠された恰好になっている。」

「それでは〈抽象的人間労働〉の表れとしての〈価値〉が相手商品の具体的な肢体からそれ自身の根源的独自性を取り戻すのはいかにしてか。それは〈相対的価値形態〉に位置した商品Aが、その交換相手として商品Bにだけ限定されることをやめて、CにもDにもEにも、……等々というように、どんどん関係を拡大していった、商品Aにおいてその〈相対的価値形態〉が〈全体的な展開〉を見せることによってである。そのときにはもはや〈価値〉は、等価物とされるいかなる相手商品のそれぞれの特異的具体的肢体からも解き放たれて、それ自身の姿を現わさざるをえなくなっている。これが「第2の価値形態」であるが、ところで、〈相対的価値形態〉が「価値」関係の中で主役の座を占めるのはここまでである」。

この全体的な、または展開された価値形態では、商品の相対的価値表現が、「未完成であり」、「寄木細工のように雑多であり」、「統一的な現象形態をもっていない」ことによって、「事実上すでにこの列に含まれている逆の関係」(同上、87—8ページ)に発展する。こうして一般的価値形態が成立するが、橋本氏は次のように指摘している。

「第3の価値形態では、それまで〈相対的価値形態〉の側にたつ商品によってあたかも

押し付けられるようにして、相手商品を価値物として表すための従属的位置に立っていたはずであった〈等価形態〉こそが、実は価値関係の主役であることがいまや明らかになるのである。すなわち形態3は、〈相対的価値形態〉の側に立つ多数の商品の列の中から特定の一商品、たとえば商品Aだけが排除されて、そのみが単独に〈等価形態〉の側に立たされた形である。形態2の関係を裏返しただけに見えるこの関係の中では、いかなる新たな商品が登場してきても、そのすべては、特定化された〈等価形態〉商品Aの〈統括の下に入る〉ことによってはじめて、晴れて価値物として商品仲間の一員となれるのである。(ところが形態2では、いかなる商品の〈相対的価値形態〉も、完結することのない諸々の等価商品の無限系列と関係付けられていた。) こうなってみると明らかに、価値関係における主役と脇役との転倒が生じている……」。

一般的等価形態は、「諸商品の交換価値の結晶」あるいは「一般的労働時間の体化物」(『経済学批判』, 武田他訳, 岩波文庫, 52—3ページ)として、それ以外のすべての商品に価値表現をあたえることによってそれらを互いに関連させ、それ自身が他のすべての商品との交換可能性を獲得することにより、それ自身が社会的価値の体現物として万人により求められるものとなる。一般的等価物は、消費対象としての商品から、全商品の交換を媒介し、それによって全商品とかわりそれらを支配する特別な商品へと転化している。それは他の諸商品の価値の消極的な表現手段としての商品から、それ自身で価値物の代表者となり、それによって価値尺度、流通手段、貨幣としての機能を獲得し、商品世界の主人公、社会的富の体現物へと転化しているのである。

ここでの性格転換を見極めておくことはきわめて重要であるから、マルクスにも語らせ

よう。「C一般的価値形態」を論ずる最初のところで、マルクスは「価値形態の変化した性格」について、次のように述べている。

「新たに得られた形態は、商品世界の価値を、商品世界から分離されたひとつの同じ商品種類、たとえばリンネルで表現し、こうしてすべての商品の価値をその商品とリンネルとの同等性によって表す。リンネルと等しいものとして、どの商品の価値も、今ではその商品自身の使用価値から区別されるだけではなく、一切の使用価値から区別され、まさにこのことによって、その商品とすべての商品とに共通なものとして表現されるのである。だからこそ、この形態ははじめて現実に諸商品を互いに価値として関係させるのであり、言い換えれば諸商品を互いに交換価値として現れさせるのである。」(『資本論』第1巻, 前掲邦訳, 89ページ)。

「一般的価値形態は、ただ商品世界の共同の仕事としてのみ成立する。一つの商品が一般的価値表現を得るのは、同時に他のすべての商品が自分達の価値を同じ等価物で表現するからに他ならない。そして新たに現れるどの商品種類もこれにならなければならない。こうして、諸商品の価値対象性は、それがこれらの物の純粹に「社会的な定在」であるからこそ、ただ諸商品の全面的な社会的関係によってのみ表現されうるのであり、したがって諸商品の価値形態は社会的に認められた形態でなければならないということが、明瞭に現れてくるのである。」(同上, 90ページ)

「(一般的等価物とされた——美馬挿入) リンネルの物体形態は、いっさいの人間労働の目に見える化身、その一般的な社会的な蛹化として認められる。織布、すなわちリンネルを生産する私的労働が、同時に、一般的な社会的形態に、すなわち他のすべての労働との同等性の形態に、あるのである。一般的価値形態をなしている無数の等式は、リンネルに実現されている労働を、他の商品に含まれて

いるそれぞれの労働に順々に等置し、こうすることによって織布を人間労働一般の一般的な現象形態にする。このようにして商品価値に対象化されている労働は、現実の労働のすべての具体的形態と有用的属性とが捨象されている労働として、消極的に表されているだけではない。この労働自身の積極的な性質がはっきりと現れてくる。この労働は、いっさいの現実の労働がそれらに共通な人間労働という性格に、人間の労働力の支出に、還元されたものである。諸労働生産物を無差別な人間労働の単なる凝固として表す一般的価値形態は、それ自身の構造によって、それが商品世界の社会的表現であることを示している。こうして、一般的価値形態は、この世界の中では労働の一般的な人間的性格が労働の独自の社会的性格となっているということを明らかに示しているのである。」(同上、90-1ページ)

一般的価値形態、すなわち形態3がはじめて、商品世界に一般的な社会的な相対的価値形態を与える。それは一つの商品を一般的等価物として商品世界から排除することによってではあるが、これらのことによって商品は純粋に人間労働の体化物としての価値定在として、自由な社会的関係を結ぶことができるようになる。そうすると商品はその価値量に応じて交換され、その需要供給に応じて生産をも支配するようになるのである。一般的等価物は次第に貨幣商品に固定化していくが、それとともに貨幣はまた社会的富の代表者となって商品取引と生産を支配するようになるというわけである。

「一般的等価形態は価値一般の一つの形態である。……そして(これが——美馬挿入)最終的に一つの独自の商品種類に限定された瞬間から、はじめて商品世界の統一的な相対的価値形態は客観的な固定性と一般的な社会的妥当性とをかけたのである」(同上、93-4ページ)。この特殊な商品は貨幣商品

となり、貨幣として機能するようになる。商品世界の中で一般的等価物の役割を演ずることが、貨幣の「独自の社会的機能」となり、また「社会的独占」となる。そして金が貨幣商品となる瞬間から「一般的価値形態は貨幣形態に転化しているのである」(同上、95ページ)。

このような主客転倒を、橋本氏は次のように解説している。「しかし考え直してみれば、もともと社会的なものとして生まれてきていた〈価値〉が〈相対的価値形態〉と〈等価形態〉との(二商品)の対立的関係において〈価値〉としてその最初の姿をあらわして以来、その関係における本当の主役はもともと実は〈等価形態〉の方だった、すなわち、潜在的(即自的)主役が顕在化しただけとも言えるのである。そしてさらに、形態3における等価形態が、より普遍化した商品世界の中で固定した安定的な地位を獲得した姿、それが〈貨幣〉であって、この関連で見れば、形態3と形態4とは一まとめに位置付けられるわけで、したがって、〈貨幣〉こそが〈価値〉世界の真の主役ということになる。」

「相対的価値形態」と「等価形態」の主客転倒を、潜在的主役の顕在的主役への顕現によって説明しきれるのかどうかは判然としないが、「貨幣こそが価値世界の真の主役になる」のはその通りであろう。

5

商品世界では、労働の一般的な人間的な性格が、労働の独自の社会的性格をなしていること、したがって人間労働という抽象的な労働の支出を現わしている貨幣が、その世界の主役となることがわかった。次の問題は、人間が生み出した商品や貨幣の取引が人間の経済行動を支配し、人間は自ら生み出した商品・貨幣の運動に従属している実情を、人間の自己疎外として批判的に概念把握し、その

克服の道を探ることである。

マルクスは言う、「それでは労働生産物が商品形態をとるとき、その謎のような性格はどこから生ずるのか？ 明らかにこの形態そのものからである。いろいろな人間労働の同等性は、いろいろな労働生産物の同等な価値対象性という物的形態を受け取り、その継続時間による人間労働の支出の尺度は労働生産物の価値量という形態を受け取り、最後に、生産者たちの労働の前述の社会的規定がその中で実証されるところの彼らの諸関係は、いろいろな労働生産物の社会的関係という形態を受け取るのである。だから、商品形態の秘密はただ単に次のことのうちにあるわけである。すなわち、商品形態は人間に対して人間自身の労働の社会的性格を労働生産物そのものの対象的性格として反映させ（橋本訳では映し出し）、これらの物の社会的な自然属性として反映させ（映し出し）、したがってまた、総労働に対する生産者たちの社会的関係をも諸対象の彼らの外に存在する社会的関係として反映させる（映し残してゆく）ということである。」（同上、97 ページ）。

「ここで人間にとって諸物の関係という幻影的な形態を取るものは、ただ人間自身の特定の社会的関係でしかないのである。それゆえ、その類例を見出すためには、われわれは宗教的世界の夢幻境に逃げこまなければならない。ここでは人間の頭の産物が、それ自身の生命を与えられて、それら自身の間でも人間との間でも関係を結ぶ独立した姿に見える。同様に、商品世界では人間の手の生産物がそう見える。これを私は呪物崇拝と呼ぶのであるが、それは、労働生産物が商品として生産されるや否やこれに付着するものであり、したがって商品生産と不可分なものである。」（同上、98 ページ）。

人間の社会的関係が人間の外に生み出された商品の価値関係のなかに映し出され、宗教とは違って、後者が独自の法則性に従って現

実の人間関係を支配することになる結果、人間は自ら生み出した物の世界から逃れることができず、逆に進んで物の世界の法則に従おうとするようになる。マルクスはそれを^{フエティシズムス}呪物崇拝と呼ぶのであるが、ここまでのところでは、商品生産社会においては人間関係が価値関係に映し出され、人間は価値関係に支配されることが明らかにされた。次は人間の歴史の中における商品生産社会の位置付けである。

「商品世界の呪物的性格は、前の分析がすでに示したように、商品を生産する労働の特有な社会的性格から生ずるものである。およそ使用対象が商品になるのは、それらが互いに独立に営まれる私的諸労働の生産物であるからに他ならない。これらの私的諸労働の複合体は、社会的総労働をなしている。生産者達は自分達の労働生産物の交換をつうじてはじめて社会的に接触するようになるのだから、彼らの私的諸労働の独自の社会的性格もまたこの交換においてはじめて現れるのである。言い換えれば、私的諸労働は、交換によって労働生産物がおかれ労働生産物を介して生産者達がおかれるところの諸関係によって、はじめて実際に社会的総労働の諸環として実証されるのである。」（同上）。

互いに独立に生産しながら、交換によって社会的総労働の一環たることを実証しなければならない生産者の社会では、労働生産物は商品となり、商品の価値関係を通して社会的生産が規制されることにならざるを得ない。逆にいえば、独立した生産者が行なう私的労働の社会的性格は商品価値として実証されることによって、社会的有用労働の総体に参加することができるのである。ここに、生産者達が商品社会の法則に自らを順応させ、進んで交換価値と貨幣を求めて活動し、呪物崇拝に身をやつすことになる原因がある。

「それだから、生産者たちにとっては、彼らの私的諸労働の社会的関係は、そのあるが

ままのものとして現れるのである。すなわち、諸個人が自分達の労働そのものにおいて結ぶ直接に社会的な諸関係としてではなく、むしろ諸個人の物的な諸関係および諸物の社会的な諸関係として、現れるのである。労働生産物は、それらの交換の中ではじめてそれらの感覚的に違った使用対象性から分離された社会的に同等な価値対象性を受け取るのである。このような有用物と価値物とへの労働生産物の分裂は、交換がすでに十分な広がりと重要性をもつようになり、したがって有用な諸物が交換のために生産され、したがって諸物の価値性格がすでにそれらの生産そのものに際して考慮されるようになった時に、はじめて実際に実証されるのである。」(同上、99 ページ)。

したがって独立して自由に生産し、その生産物を商品として自由に交換しようとしている生産者たちは、実は決して自由ではない。彼らは常に商品市場の動きに目を凝らし、自分の生産物を商品として実現しなければならない。彼らは商品市場の動きに順応しているばかりでなく、それに支配されているのである。

「交換者たち自身の社会的運動が彼らにとっては諸物の運動の形態を持つのであって、彼らはこの運動を制御するのではなく、これによって制御されるのである。互いに独立に営まれながらも社会的分業の自然発生的な諸環として全面的に互いに依存しあう私的諸労働が、絶えずそれらの社会的に均衡の取れた限度に還元されるのは、私的諸労働の生産物の偶然的な絶えず変動する交換割合をつうじて、それらの生産物の生産に社会的に必要な労働時間が、たとえば誰かの頭上に家が倒れてくる時の重力の法則のように、規制的な自然法則として強力に貫かれるからである」(同上、101 ページ)。

商品世界の物象化現象と呪物的性格は、すでに宗教に対比されることで、フォイエル

バッハの言う人間の疎外状態の結果であることが明らかにされているが、「人間の手の生産物」が人間たち自身の生産行動を支配している現実のよって来る原因を分析する作業は、より深い『経済学・哲学草稿』に言う「労働の自己疎外」を確認する作業にもなっている。

橋本氏は次のように指摘している。「人間の社会関係が〈諸物の社会関係〉として現れるという転倒した事態をきびしく「幻影的形態」(物神崇拜的在り方)として指摘している点のうちには、〈人間の自己疎外〉を克服されるべき対象として見据えつづけるマルクスの基本的観点が、ここでもすでにしてゆるぎなく確立されている……資本ばかりでなく、商品も貨幣も、そして価値一般も、したがって価値の実体たる限りでの〈労働(すなわち抽象的労働一般)〉も、〈人間の自己疎外〉の地平上の同族に他ならない」。

マルクスは商品世界を他の人間共同体と対比させることによって、その歴史的過渡的な性格を明らかにした後に、同時にその克服の展望をも指し示している。「およそ、現実の世界の宗教的な反射は、実践的な日常生活の諸関係が人間にとって相互間および対自然のいつでも透明な合理的関係をあらわすようになったときに、はじめて消滅しうるのである。社会的生活過程の、すなわち物質的生産過程の姿は、それが自由に社会化された人間の所産として人間の意識的計画的な制御の下におかれたとき、はじめてその神秘のヴェールを脱ぎ捨てるのである。しかしそのためには、社会の物質的基礎または一連の物質的存在条件が必要であり、この存在条件そのものがまた一つの長い苦悩に満ちた発展史の自然発生的な所産なのである」(同上、106 ページ)と。

6

マルクスが経済学の研究に着手した時、参

考にしたエンゲルスの『国民経済学批判大綱』は、労働者の不幸の根源を私的所有＝私有財産に求め、それを正当化している経済学者を手厳しく批判していた。「経済学者はますます誠実さから遠ざかる。……たとえばリカードはアダム・スミスよりも罪が重く……」(邦訳全集, 1巻, 545ページ)。マルクスも『「プロイセン国王と社会改革」への批判的論評』の中で、イギリスの国民経済学者の最も優れた代表者として「冷笑的なりカードの弟子であるマカロック……」(同上, 433ページ)について書いている。

しかしマルクスは経済学の研究を進めるうちに、リカードが国民経済学の立場に立って、その理論を一貫させようとしていることに注目するようになってくる。「よく注意してほしいのは、……人類の友であるリカード氏が生活手段を労働者の自然価格と述べ、したがってまたそれが、彼の労働の唯一の目的と述べた……ということである」(『経済学ノート』杉原・重田訳, 53ページ)。

「リカードがこのように、労働者が労働の生産力が向上しても何物も得ないことを強調していることは、非常によろしい」(同上, 47ページ)。「リカードの学説が現在の状態に対して重要性をもつのは……それが、蓄積がおしすすめられる間に生起する資本家間の競争およびその利潤の減少が、スミスの前提するように必然的に労賃の高騰をもたらすものでは決してないことを示したという点だけだ」(同上, 56ページ)。「国民経済学的な観点に立てば、リカードの命題は正当であり、筋がとおっている。シスモンディとセーとが、国民経済学の非人間的な結論とたたかうためには、国民経済学から外へとび出さなければならないということとは、国民経済学にとって何を意味するだろうか。人間的なものは国民経済学の外にあり、非人間的なものがその内にあることを意味するにほかならない」(同上, 60ページ)。

こうしたリカードウ経済学に対する人道的反発は、マルクスが経済学の研究を進めて、私的所有＝私有財産の本質を疎外された労働として見破ることを契機に払拭される。

「私有財産は、外化された労働の、すなわち自然や自分自身に対する労働者の外的関係の、産物であり成果であり、必然的帰結なのである。……私有財産の発展の頂点に来てはじめて、私有財産のこの秘密が……再びはつきりしてくる。この発展は、これまで解きほぐされなかったさまざまな衝突について、ただちに解決の曙光を与える。(1)国民経済学は生産の本来の心髄としての労働から出発するが、にもかかわらず、それは労働にはなにものもをも与えず、私有財産にすべてを与える。プルードンはこの矛盾から、労働を擁護し私有財産に反対する結論を引き出した。しかしわれわれは、外見上のこの矛盾が疎外された労働の自己矛盾であること、そして国民経済学がたんに疎外された労働の諸法則を言いあらわしたに過ぎなかったことを、見ぬくのである。……(2)私有財産に対する疎外された労働の関係から、さらに結果として生じてくるのは、私有財産等々からの、隷属状態からの、社会の解放が、労働者の解放という政治的な形で表明されるということである。……労働者の解放の中にこそ、一般的人間的な解放がふくまれているからなのである」(『経済学・哲学草稿』城塚・田中訳, 102-4ページ)。

こうして一方ではリカードウ経済学に対する評価が上がり、他方では『聖家族』で好意的に扱われていたプルードン社会主義の評価は次第に下がって、後者に対する批判は『哲学の貧困』で頂点に達するのである。リカードウは私有財産の神聖を無条件的に前提することによって、疎外された労働＝私有財産の法則を大胆に定式化することができた。「アダム・スミスやリカードのようなこの時代の歴史家たる経済学者たちは、ブルジョア的生産の諸関係の中でいかにして富が獲得される

かを証明し、これらの関係をカテゴリーや法則に定式化し、そしてまた、これらの法則、これらのカテゴリーが、富の生産にとって封建社会の諸法則や諸カテゴリーよりもいかに優れているかを証明すること以外には、他のいかなる使命をも持たない。彼らから見れば、貧困は、すべての出産に伴う陣痛でしかない」(『哲学の貧困』邦訳全集、4巻、146ページ)。

「リカード学説は、近代ブルジョアジー全体の見解を、厳格に、無慈悲に、要約している。……リカードが今日の社会の、ブルジョア社会の理論として、科学的に説いたものを、プルードン氏が「未来の革命的理論」として発表している……」(同上、75ページ)。「リカードは、現在の社会の中に彼の出発点を求め、そうすることによって、この現存の社会がどのようにして価値を構成するかを、われわれに説明してくれる。……労働時間による価値の決定は、リカードにとっては交換価値の法則であり、プルードン氏にとっては使用価値と交換価値とを総合するものなのである。リカードの価値論は現存の経済生活の科学的解説であり、プルードン君の価値論はリカード理論のユートピア的解釈である。リカードはあらゆる経済的諸関係の中から自分の公式を導き出し、次いで、この公式をもってすべての現象を——地代、資本蓄積、および賃金と利潤との関係などの、ちょっと考えただけでは彼の公式と矛盾するように思われる諸現象をも——説明することによって、自分の公式の正しさを確証する。このことこそまさに、彼の理論を一個の科学的体系とするものである。」(同上、79ページ)。

ヘーゲルの法の哲学の批判を終えて現実の社会を変革する諸条件を明らかにするために、経済学の批判へと歩みを進めていたマルクスにとって、商品と貨幣、資本が支配する現存の経済社会は、ひとつの歴史的な経過点としての疎外された社会であると認識されていた。

そのようなマルクスにとって、リカードの労働価値説は、人間の一つの疎外状態である社会＝商品世界の法則を科学的に明らかにしたものであった。マルクスの課題は、疎外された労働の体化物である価値、貨幣、資本を分析して商品世界の止揚の諸条件を明らかにしてゆくことであった。リカードの価値論を労働という商品(59年以後は労働力商品——美馬)に適用したとき、一方には分業と協業に基づく巨大な生産力が、他方には「近代的な労働者奴隷制の公式」(同上、81ページ)が明らかとなる。「賃労働と資本」の分析が必要となってくるのである。

7

商品世界の呪物崇拜、あるいは人間関係の物象化現象と疎外された労働の関係を再確認するために、初期マルクスにまで遡ってみた。そこでは、国民経済学が前提としている私有財産と労働価値学説が疎外された労働の法則とその諸帰結を語ったものであることが確認された。再び橋本氏の著書に戻って、次の課題へと進むことにしよう。橋本氏は次のように言っている。「そこで私たちがマルクスにしたがって明らかにしたい点は、〈資本〉は〈商品—貨幣〉の〈人間にとっての自己疎外的本質〉の顕在化した完成態に他ならないという点なのである」。

われわれもまた橋本氏とともに、商品世界においては貨幣がさまざまな機能を果たす中で、価値の体化物として、したがってまた富の体化物として、貨幣そのものが自己目的として誰からも求められるものとなり、しかもその貨幣への欲求には限度がなくなることを確認しておきたい。橋本氏はこうした貨幣蓄蔵を「〈商品〉と〈貨幣〉との間の〈価値の形態変換〉の当初の意味(〈手段—目的〉関係)が次第に変質し、やがて逆転してゆく過程」と捉えている。

「商品流通そのものの最初の発展とともに、第一の変態の産物、商品の転化した姿態または商品の金蛹^{きなぎ}を固持する必要と熱情とが発展する。商品は、商品を買うためではなく、商品形態を貨幣形態と取り替えるために売られるようになる。この形態変換は、物質代謝の単なる媒介から自己目的になる。……こうして貨幣は蓄蔵貨幣に」なる。……「商品交換価値として、または交換価値を商品として固持する可能性とともに、黄金欲が目覚めてくる。商品流通の拡大につれて、貨幣の力が、すなわち富のいつでも出動できる絶対的に社会的な形態の力が、増大する。……しかし、貨幣はそれ自身商品であり、誰の私有物にでもなれる外的な物である。こうして社会的な力が個人の個人的な力になるのである。」(『資本論』第1巻、前掲邦訳、170-2ページ)。

これに対して貨幣から出発し、流通の中で自分を保存するばかりでなく、剰余価値を付け加えて、より多くの貨幣として帰ってくるのが資本である。「この運動がこの価値を資本に転化するのである」(同上、196ページ)。「資本としての貨幣の流通は自己目的である。……それだから資本の運動には限度がないのである」(同上、198ページ)。「この運動の意識ある担い手として、貨幣所持者は資本家になる」(同上、200ページ)。

貨幣は自らの持つ特性によって、貨幣蓄蔵者と資本家を作り出すのであるが、両者の違いは次のように説明されている。「この絶対的な致富衝動、この熱情的な価値追及は、資本家にも貨幣蓄蔵者にも共通であるが、しかし貨幣蓄蔵者は気の違った資本家でしかないのに、資本家は合理的な貨幣蓄蔵者^{ラツィオネル}なのである。価値の無休の増殖、これを貨幣蓄蔵者は貨幣を流通から救い出そうとすることによって追及するのであるが、もっと利口な資本家は、貨幣を絶えず繰り返し流通に投げ込むことによって、それを成し遂げるのである。」

(同上、200ページ)。

橋本氏はこの部分に次のような注釈をつけている。「ここで「合理的」という訳語を当てられている rationell という言葉は、同様に「合理的」という訳語が可能な rational とは同じものではない。後者に対しては、倫理的な意味をも併せ持ちうるものとしての「理性的」という訳語が可能だが、前者にはこの訳語は不向きで、それはいわゆる〈効率優先〉だけにふり向けられる「合理性」に対応した形容詞であって、そこには人間的・倫理的含意はほとんど皆無といってよい」。

次に橋本氏が注目するのが、やはり次の一節である。「諸商品の価値が単純な流通の中でとる独立な形態、貨幣形態は、ただ商品流通を媒介するだけで、運動の最後の結果では消えてしまっている。これに反して、流通G—W—Gでは、両方とも、商品も貨幣もただ価値そのものの別々の存在様式として、すなわち貨幣はその一般的な、商品はその特殊な、いわばただ仮装しただけの存在様式として、機能するだけである。価値は、この運動の中で消えてしまわないで絶えず一方の形態から他方の形態に移っていき、そのようにして一つの自動的な主体に転化する。自分を増殖する価値がその生活の循環の中で交互にとってゆく特殊な諸現象形態を固定してみれば、そこで得られるのは、資本は貨幣である、資本は商品である、という説明である。しかし実際には、価値はここでは一つの過程の主体になるのであって、この過程の中で絶えず貨幣と商品とに形態を変換しながらその大きさそのものを変え、原価値としての自分自身から剰余価値としての自分を突き放し、自分自身を増殖するのである。なぜならば、価値が剰余価値を付け加える運動は、価値自身の運動であり、価値の増殖であり、したがって自己増殖であるからである。」(同上、201ページ)。

橋本氏が重視するのは、資本としての貨幣

は「そのようにして一つの自己運動する主体に転化する」、あるいは「価値はここでは一つの過程の主体に形態変換しながら……自分自身を増殖する」、「価値が剰余価値を付け加える運動は……自己増殖」である、とする指摘である。商品流通から資本の流通への形態変化の中に、橋本氏は先に見た〈相対的価値形態〉と〈等価形態〉の「主客転倒」を再び見出し、それが人間社会の疎外状態をいっそう深め完成するものであるとして、「〈資本の論理〉は〈貨幣の物神性〉の支配の終局的到達点であり、〈価値形態への人間の自己疎外の完成形態〉である」と言い放つのである。

8

『パリ草稿』に見られた労働の疎外による労働者の窮乏状態への言及は、たしかに『資本論』の価値論の段階ではまだ出てきはないが、労働力商品の売買が行なわれ、労働者が資本家の工場に入るや否や、「資本の他者収奪的本性」は遺憾なく発揮されるようになる。

第5章第1節労働過程の最後の部分で、マルクスは次のように指摘している。「労働過程は、資本家による労働力の消費過程として行われるものとしては、二つの特有な現象を示している。労働者は資本家の監督のもとで労働し、彼の労働はこの資本家に属している。……第二に、生産物は資本家の所有物であって、直接生産者である労働者のものではない。」(同上、243ページ)。こうして労働者は資本家の指示にしたがって労働するのであり、その生産物は自分のものにはならない。つまり、この労働は疎外された労働に他ならず、その成果はまた労働者から疎外されて資本家のものとなるのである。

資本が労働力商品を買ったのは、労働者に労働させて自ら自己増殖するためである。「資本家は貨幣を新たな生産物の素材形成者

または労働過程の諸要因として役立つ諸商品に転化させることによって、すなわち諸商品の死んでいる対象性に生きている労働力を合体させることによって、価値を、すなわちすでに対象化されて死んでいる過去の労働を、資本に、すなわち自分自身を増殖する価値に転化させるのであり、胸に恋でも抱いているかのように、「働き」は始める活気付けられた怪物に転化させるのである。」(同上、255-6ページ)。

資本という怪物がどのように活動して労働者を死ぬほどこき使うか、については「第8章労働日」に詳しく展開されている。マルクスは1867年の時点で、「工場法」の番人たる工場監督官達を作成した報告書を引用しつつ、資本家達の剰余労働への渴望の激しさをいろいろと暴露しているが、「これまでわれわれが労働日の延長への衝動、剰余労働に対する人狼的渴望を考察してきた領域は、イギリスのあるブルジョア経済学者の言うところでは、アメリカインディアンに対するスペイン人の残虐にも劣らない極度の無法のために、資本がついに法的な取締りの鎖につながれることになった領域だった」。したがって「搾取の法的制限のない諸産業部門」、「夜間労働」、「交代制」など非人間的な労働の実態もまた詳しく明らかにされている。

いかに資本が剰余価値渴望のために労働日を延長しようとしても、労働日には24時間という自然的限界があり、また人間生活の伝統に基づく社会的限界もある。そしてまた資本の搾取に対する労働者の闘いは、国法による労働日の制限をもたらした。限られた労働日を前提として、必要労働日部分を短縮することによりもたらされるのは相対的剰余価値である。労働の生産力の発展は相対的剰余価値部分を延長するが、その主要な手段が労働用具の開発であり、とりわけ自然諸力を生産力へと動員する機械の充用である。本来、労働用具や機械の発達は人間労働を軽減するも

のであるが、これらの資本による充用は、かえって労働者の苦痛を増やすものとなる。

「第13章機械と大工業」の第3節は「機械経営が労働者に及ぼす直接的影響」を論じているが、そこにはまず「資本による補助労働者の取得」として主婦や児童が工場労働に編入される必然性が説明されており、「機械は労働者家族の全員を労働市場に投ずることによって、成年男子の労働力の価値を彼の全家族の間に分割する」として、資本の搾取の下に入った「児童や少年やそしてまた労働夫人の肉体的退廃」(同上, 519 ページ)が暴露されて、次いで「労働日の延長」や「労働の強化」の実情が「工場監督官報告書」によって、詳しく明らかにされている。

機械が利用されている工場全体ではどうか。「マニファクチュアや手工業では労働者が自分に道具を奉仕させ、工場では労働者が機械に奉仕する。前者では労働者から労働手段の運動が起こり、後者では労働手段の運動に労働者がついて行かなければならない。……機械労働は神経系統を極度に疲れさせると同時に、筋肉の多面的な働きを抑圧し、心身のいっさいの自由な活動を封じてしまう。労働の緩和でさえも責め苦の手段となる。なぜならば、機械は労働者を労働から解放するのではなく、彼の労働を内容から解放するのだからである。資本主義的生産がただ労働過程であるだけではなく、同時に資本の価値増殖過程でもある限り、どんな資本主義的生産にも労働者が労働条件を使うのではなく、逆に労働条件が労働者を使うのだということは共通であるが、しかし、この転倒は、機械によってはじめて技術的に明瞭な現実性を受け取るのである。一つの自動装置に転化することによって、労働手段は労働過程そのものの中では資本として、生きている労働力を支配し吸い尽くす死んでいる労働として、労働者に相対するのである。」(同上, 552-3 ページ)。

ここにもまた、労働者と労働手段の間の主客転倒が機械によって現実化することが説明されているのであるが、「労働手段が労働者を打ち殺す」に至るとやむにやまれず労働者の反抗が始まる。機械は絶えず新たな生産領域を捉えることによって、従来型の遅れた経営を打ち滅ぼすのであるが、このような機械は「疎外された姿」と名指しされている。『資本論』ではじめて疎外ということばが登場している。「およそ資本主義的生産様式は、労働条件にも労働生産物にも労働者に対して独立化され疎外された姿を与えるのであるが、この姿はこうして機械によって完全な対立に発展するのである。それゆえ、機械とともに はじめて労働手段に対する労働者の凶暴な反逆が始まるのである」(同上, 564 ページ)と。

近代工業の革命的な性格とその資本主義的充用の矛盾は、「労働者階級の不断の犠牲と労働力の無際限な乱費と社会的無政府の荒廃との中で暴れ回る」(同上, 634 ページ)けれども、この疎外された関係を克服しようとする現実の力と意識とその条件もまた、大工業によって生み出され強められていくのである。

相対的剰余価値の生産における労働者状態は、『資本論』第1巻の最終編である「第7編23章」において次のように総括されている。「われわれは第4編で相対的剰余価値の生産を分析した時に、次のようなことを知った。すなわち、資本主義的体制の下では、労働者の社会的生産力を高くするための方法はすべて個々の労働者の犠牲において行なわれるということ、生産の発展のための手段はすべて、生産者を支配し搾取するための手段に一変し、労働者を不具にして部分人間となし、彼を機械の付属物に引き下げ、彼の労働の苦痛で労働の内容を破壊し、独立の力としての科学が労働過程に合体されるにつれて労働過程の精神的な諸力を彼から疎外するというこ

と、これらの手段は彼が労働するための諸条件をゆがめ、労働過程では彼を狭量陰険きわまる専制に服従させ、彼の生活時間を労働時間にしてしまい、彼の妻子を資本のジャガノート車の下に投げ込むということ、これらのことをわれわれは知ったのである。」(同上、840 ページ) と。

「第3編絶対的剰余価値の生産」と「第4編相対的剰余価値の生産」においては、価値増殖過程に動員された労働者の労働苦と奴隷状態が確認されたとすれば、「第6編労賃」では、労働の価格という現象形態に隠された不払い労働が暴露され、労働者の消費生活の貧困と相対的な地位低下の必然性が示される。

そして「第7編資本の蓄積過程、21章単純再生産」では、先ずそうした労働者が絶えず再生産される様子を説明している。ここにも疎外という言葉が用いられている。「一方では生産過程は絶えず素材的富を資本に転化させ、資本家のための価値増殖手段と享楽手段に転化させる。他方ではこの過程から絶えず労働者が、そこに入ったときと同じ姿で——富の人的源泉ではあるがこの富を自分のために実現するあらゆる手段を失っている姿で——出てくる。彼がこの過程に入る前に、彼自身の労働は彼から疎外され、資本家のものとされ、資本に合体されているのだから、その労働はこの過程の中で絶えず他人の生産物に対象化されるのである。」(同上、743 ページ)。

「7編23章」では、資本蓄積の進行に伴う資本の有機的構成の高度化が明らかにされ、相対的過剰人口＝産業予備軍の発生の必然性が明らかにされる。相対的過剰人口の存在そのものが、労働者の生活の不安定と極貧状態を示しているが、彼らはまた現役労働者群に対してその労働条件、生活条件に絶えず圧力をかけ続ける。資本主義社会においては貧困が絶対的な法則であることは次のように説明される。

「社会的な富、現に機能している資本、その増大の規模とエネルギー、したがってまたプロレタリアートの絶対的な大きさとその労働の生産力、これらのものが大きくなればなるほど、産業予備軍も大きくなる。自由に利用されうる労働力は、資本の膨張力を発展させるのと同じ原因によって、発展させられる。つまり産業予備軍の相対的な大きさは、富の諸力といっしょに増大する。しかしまた、この予備軍が現役労働者群に比べて大きくなればなるほど、固定した過剰人口はますます大量になり、その貧困はその労働苦に反比例する。最後に、労働者階級の極貧層と産業予備軍が大きくなればなるほど、公認の受救貧民層もますます大きくなる。これが資本主義的蓄積の絶対的な一般的な法則である。」(同上、839 ページ)。

疎外された労働は資本として生産力をつてなく発展させ、自分の手元には膨大な富を蓄積しながら、労働者には貧困を必然化することによって、自らを止揚する諸条件とそれを担う力を生み出しているというのである。われわれは橋本氏とともに、『資本論』の中に初期の疎外論の重層的な貫徹と、その様々ないっそう具体化された姿を見出すことができるというてよいであろう。

かつての「社会主義」諸国がそれほどボロを出しておらず、資本主義諸国内の労働者の組織された力がまだ強く、労働者の国際的連帯が図られていた時代には、「労働の人間化」や「貧困の克服」が世界的に真剣な人間的な課題とされ、またそのための多様な試みが一定の成功を収めたことがあった。しかし既存の社会主義諸国の崩壊や、世界中の資本主義諸国内部での産業構造の劇的な変化、金融資本が主導するグローバリゼーションの進展などは、労働階級の力を弱め、資本に対抗して地道に積み上げられてきた人間主義的な成果を葬り去ろうとしている。そして人類にとってこの反動的な動きを鼓舞激励し、人間的な

自己実現の欲求を、ふたたび市場経済が許容する限りでの形式的な自由・平等に限りなく矮小化しようとしているのが、現在流行のニューライトの思想と行動である。

このような人間の尊厳のみならず、生存さえも否定されかねない危機的な状況に立ち向かおうとする時、もう一度人間のあり方の根源に立ち返って、「人間的解放」の理論につ

いて熟考することは、不可欠になっているように思われる。橋本氏の著書は、現在の危機的状況に抗して人間主義の原理を再確認するとともに、それと関連させて、現代的な政治のあり方としての民主主義論や、革新運動のあり方としての非暴力論などをも展開しているのであるが、それらについては別の機会に取り上げることとしたい。